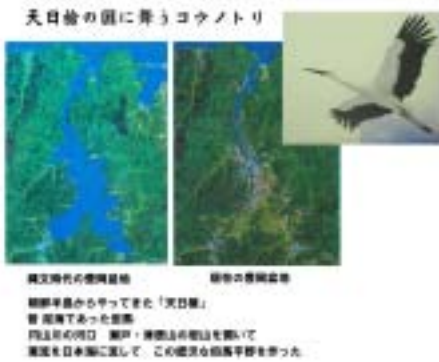


## 但馬 Country Walk アルバム

但馬 天日槍の国とコウノトリ 2005.6.23.

大陸から幸せ運ぶ「コウノトリ」と「鉄の技術を持ってやってきた天日槍」

2005.7.10. by Mutsu Nakanishi



兵庫県北部 但馬 城下町 出石 天日槍を祭る但馬一宮 出石神社がある 2005.6.23.

6月23日 古代史の仲間誘われて、兵庫県北部日本海側 街中を大河円山側流れ下る豊岡 「天日槍の国 但馬」へバスツアー。

出石そば食べて、「伝説の天日槍の国」を訪ねて そして コウノトリを見るという企画。父の国が丹後なので、よく知っている場所であるが、長いこと歩いてないのと「出石そば」「天日槍」「コウノトリ」この3つを同時に歩ける魅力に引かれて出かけました。

先日も「6月の最高気温 35度超 の記録」を出した「暑い暑い」豊岡である。

絶滅した「コウノトリ」を飼育して増やして現在100羽を超え 今年の秋から自然に帰すとてつもない延々のプロジェクトを進めている。

今 ヒョンなことから、一羽野生のコウノトリが大陸からやってきて一緒に住み着いているという。

「天日槍」は記紀や播磨風土記に登場する「朝鮮半島 新羅から日本にやってきた伝説のひと」幸せを運ぶコウノトリと日本に鉄の技術を持ってきた天日槍が頭の中で一つになっています。



絶滅したコウノトリの繁殖に取り組む豊岡コウノトリ公園

フェン現象でもないのに何で日本海の豊岡がそんなに暑いんや・・・?? と不思議でしたが、今回豊岡へ行ってその謎とけました。それも 土地の人によれば、「天日槍」伝説に関係して・・・

「天日槍の伝説のあるところ鉄・金属加工の産地あり」で私の頭の中では隣国播磨風土記に書かれた「産鉄の神」どうやら この天日槍がやってきたのは3世紀卑弥呼の時代に近いらしい。

その天日槍の本拠地が豊岡盆地の南端にあたるのが出石である。

出石の街は「出石そば」の一大テーマパークにすっかり変身 一大観光地。

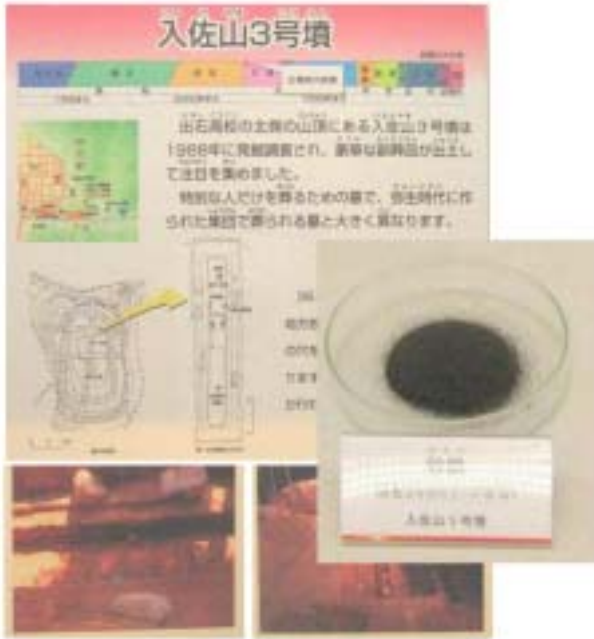
その町のはずれに天日槍を祭る出石神社があり、資料館には 4世紀出石の丘の古墳から出土した「砂鉄」が展示

されていました。もう ビックリです。

製鉄が日本で始まったとされる5世紀半ばの1000年前の4世紀「砂鉄」が「鉄」として古墳に副葬されている。本当ですか・・・と思わず聞いていました。

「天日槍の国」に4世紀「砂鉄」があった。しかも すぐ隣の丹後国では日本で最も古い製鉄地 t(遠所遺跡)で他国から持って来たと思われる「謎の砂鉄」で製鉄を始めている。

日本の鉄のルーツにつながる面白い話の展開。これはもう一度ゆっくり訪れて そして 天日槍が歩いたとされる播磨・近江・若狭をも含め、しらぺねばと思っている。益々 プレたたらが面白くなってきました。



縄文時代の豊岡盆地

現在の豊岡盆地

朝鮮半島からやってきた「天日槍」昔 泥海であった但馬 円山川の河口 瀬戸・津居山の岩山を開いて濁流を日本海に流して この肥沃な但馬平野を作った

冒頭の豊岡がなぜ暑いのか・・・

地図をよく開いてみれば判るのですが、豊岡は円山川河口と思っていたのですが、違うのです。円山川の河口に近い盆地であつたというのが答え。縄文の海進の時代には奥へ深く入った海だったという。

そんな大昔 南から円山川が流れ込む泥海であつた豊岡盆地。朝鮮半島からやってきた天日槍が河口近くの瀬戸と津居山の間の岩山を取り去り、濁流を日本海に流し落して、この肥沃な豊岡盆地(平野)を作ったという。

このため 豊岡・出石では この肥沃な地 但馬を開いた開拓の神として 土地に根付いている。

鉄 たたら といってもほとんど判らない。でも 鉄の国である伯耆・播磨・丹後と接し、この但馬に流れ込む川からは円山川を含め、砂鉄が多く取れたとも伝わっている。

また、人工繁殖させているコウノトリの公園も見てきました。

そら飛ぶコウノトリ想像したのですが、羽を切って園の中。今は自然への放鳥にそなえて 特訓中とか。

えさとなるドジョウなどが住む田圃・池など周囲の環境整備がやっと整ってきて 今年秋 試験放鳥。羽は切っても2ヶ月ではえそろい空へ飛べるそうです。その日が待ち遠しい。



大陸から幸せ運ぶ「コウノトリ」と「鉄の技術を持ってやってきた天日槍」が重なって

好きな歌 小林旭「熱き心に」の「大空の 旅の空 夢追いびと いずこ .....」のイメージが膨らんでいました。



【参考】 写真アルバム 天日槍の里 但馬(出石・豊岡・日高) 205.6.23.

古代朝鮮半島からやって来て 但馬・播磨・近江・若狭などに鉄の足跡を残した「天日槍」。但馬では湖であった豊岡の日本海出口を開いて平野を造った伝説の開拓神として深く郷に根付いていました



「出石城」と但馬国一宮「出石神社」



出石城下と辰鼓櫓と出石城からの出石の町並

2005.6.23.



但馬国一宮 出

石神社 祭神 天日槍命

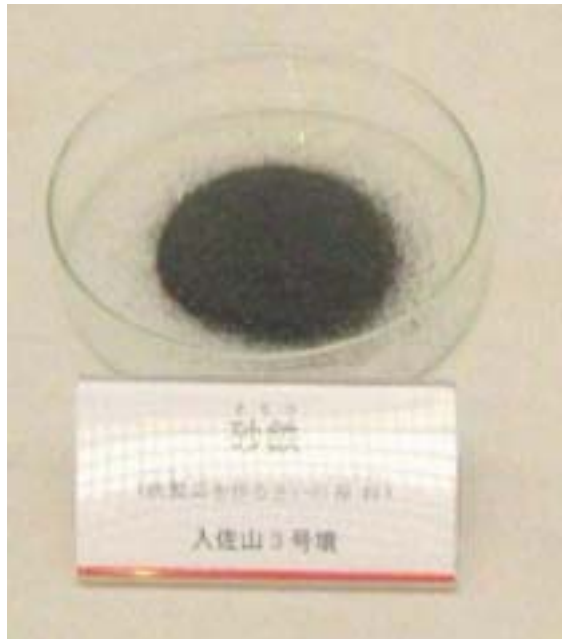
古事記、日本書紀によれば、天日槍は新羅の王子だったという。彼は赤い玉の化身として日本から来た女性と結婚したが、ある時、夫婦喧嘩の果てにこの女性は日本へ帰ってしまう。彼女を忘れられない天日槍は七種（書紀）とも八種（古事記）とも言われる神宝とともに、日本へ渡り、妻の故郷難波に向かうが、海の神に妨害されて果たせず、結局、但馬で土地の娘を娶り農耕を伝えて、但馬の開拓神として崇められる。

天日槍命は泥海であった但馬を円山川河口の瀬戸・津居山の間の岩山を開いて濁流を日本海に流し、現在の肥沃な但馬平野を現出。

円山川の治水に、また殖産興業に功績を遺された神として尊崇を集めている。

出石古代学習館 2005.6.23. 袴狭遺跡ほか古墳時代の展示

古墳時代 4 世紀後半の古墳から副葬「砂鉄」この時期 もう砂鉄は鉄として意識されていたのか???



古墳時代 4 世紀後半の古墳から副葬「砂鉄」





# 天日槍 伝 承

天日槍命は、新羅国王の王子であり、日本に渡来されたとし、その事蹟は記紀のほか『播磨国風土記』『筑前国風土記』逸文等にうかがうことができます。

天日槍命のご子孫には、田道間守命（たじまのりのみこと）や、神功皇后がいる。

出石神社社伝の『一宮縁起』には、谿羽道主命と多遲麻比那良岐と相謀り、天日槍命を祀ったと伝え、諸書によると遅くとも八世紀のはじめ頃にはすでにこの地で祭祀がおこなわれていたことがうかがわれる。

天日槍命は泥海であった但馬を、丸山川河口の瀬戸・津居山の間岩山を開いて濁流を日本海に流し、現在の豊沃な但馬平野を現出され、円山川の治水に、また殖産興業に功績を遺された神として尊崇を集めている。また、鉄の文化を大陸から持って来られた神ともいわれている。

出石神社由緒より

## 古事記、

新羅の王子であった天日槍は赤い玉の化身として日本から来た女性と結婚したが、だんだん高慢になった王子が妻をののしるようになり、この女性はこつそり日本へ帰ってしまう。彼女を忘れられない天日槍は海を渡って、妻の故郷難波に向かうが、海の神に妨害されて果たせず、迂回して但馬国に停泊。結局、但馬の地の娘を娶った。天日槍が持ってきた神宝を玉津宝といい、八種であった

## 日本書紀

新羅の王子天日槍が7種の神宝を持って日本にやってきて、但馬国におさめた。

初め天日槍は舟に乗り播磨国にやってきて穴栗邑にいた。

天皇に「お前は誰か 何処の国の人か」と尋ねられ、「新羅の王子です 日本に聖王がおられると聞いて国を弟に譲り、やってきました」と答え、天皇から「播磨国の穴栗邑と淡路島の出浅邑の二つに自由に住むように」といわれた。

「自分の住む所は許してもらえらるなら、諸国を巡り歩いて 自分で選びたい」と許しを貰う。

そして 宇治川を遡って 近江の国 次に若狭を経て但馬国に居を定め、土地の娘を娶る。

そして、曾孫が田道間守である。

## 播磨風土記

大国主命はここでは別名の葦原志許男（あしはらしこお）命として登場する。

### 御方の里

天日槍と葦原志許男は、勝負がつかないので、山の上から三本の矢を射て、落ちた所を支配地にしようということになった。

天日槍の矢はすべて但馬に落ち、葦原志許男の矢は、養父郡と気多郡に落ちた。

そこで、天日槍は但馬の出石を本拠とし、葦原志許男は養父神社と気多神社に大己貴命（おおなむちのみこと）として祀られたという。

このほか、播磨風土記には天日槍が数多くの里の項に登場する。いずれも鉄と関係深い里である。

**【揖保の里 奪谷 伊奈加川 波賀の村 糠岡 の 項など】**

「筑前国風土記 挽文」「古語拾遺」にも記述がある

## 御菓子の祖 田道間守(天日槍の曾孫) の 中嶋神社

常世の国から橘の実を持ち帰ったとされる田道間守命をお菓子の神様として祀る神社。

本殿は二間社流造という建物構造で国の重要文化財に指定され、室町中期の特色をよく示している。正長元年(1428)に再建された建物です。側面から見た造りが、後ろが短く、前に長くなった「流造」の技法です。



## 岡市コウノトリの郷公園

平成 17 年自然放鳥を目指して訓練とともコウノトリの食 一日ドジョウ 60 匹 餌確保の環境作りが続いている







### 但馬国府

但馬国府は延暦23年(西暦804年)に気多郡高田郷に遷したことが『日本後紀』によってわかっています。遷された原因や、どこから遷したのかについては記述がないためわかりませんが、移転後の国府の所在については、博物館に隣接する祢布ヶ森遺跡(にようがもりいせき)であると考えられます。

その理由は、堀で囲まれた中に大きな建物群が規則性を持って配置されていたこと、高級な食器である青磁や白磁、三彩などの他、但馬の各郡の役所で作成されたと思われる戸籍や税に関する木簡も見つかったことによります。



### 但馬国分寺跡 但馬国府 祢布ヶ森遺跡

天平13年(西暦741年)、聖武天皇は国家の安寧を願って諸国に国分寺(国分僧寺と国分尼寺)の建立の詔(みことのり)を出しました。国分寺建立の詔を受けて、諸国に派遣された国司が中心になって建設を進めました。但馬国分寺(僧寺)は豊岡市日高町国分寺に、国分尼寺は同市日高町水上から山本にかけて地域に造られました。

但馬国分寺跡は、昭和48年(1973年)から発掘調査を開始、金堂、塔、中門、回廊などの主要伽藍と東南隅を区画する築地跡、井戸などの跡も見つかりました。金堂の中心線と東南隅の築地跡からお寺の範囲はおおよそ160m四方であったと考えられます。但馬国分寺跡からは、国分寺では全国ではじめて木簡が見つかり、8世紀の但馬国分寺の様子がわかりました。



国府跡 塔礎石 金堂基壇礎石など



国分寺跡の井戸

国府跡の井戸

### 全国に作られた国分寺

